

会 議 録

| | |
|--|---|
| 会議の名称 | 西東京市図書館協議会 令和7年度第1回臨時会 |
| 開催日時 | 令和7年10月24日（金）午後1時45分から3時45分まで |
| 開催場所 | 田無第二庁舎2階 会議室 |
| 出席者 | 委員：島会長、鈴木副会長、吉田委員、箕浦委員 山辺委員、長谷川委員、福士委員 欠席：湯浅委員、橋本委員 事務局：大庭館長、司城副館長、金本庶務係長 |
| 傍聴者 | 0名 |
| 議 題 | 第1 諸報告 第2 令和6年度図書館事業評価（案）について 第3 その他 |
| 会議資料の名称 | 資料1 令和6年度図書館事業評価（案） 基本方針1－施策の方向性（1）－取組項目①ア 基本方針4－施策の方向性（2）－取組項目①イ、ウ 基本方針4－施策の方向性（2）－取組項目②イ 基本方針4－施策の方向性（2）－取組項目③ウ 基本方針4－施策の方向性（2）－取組項目③オ 資料2 事業評価質問回答 |
| 記録方法 | <input type="checkbox"/> 全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録 |
| 会 議 内 容 | |
| <p>○図書館長 定刻となりました。定足数に達していますので、只今から、令和7年度西東京市図書館協議会第1回臨時会を開催します。 本日は、2名の委員が欠席です。 本日の会議の資料として、次第を配布しています。 また、「資料1 令和6年度図書館事業評価（案）について」と、「資料2 事業評価質問回答」を机上にお配りしています。 過不足はありませんでしょうか。（同意を確認） 以降の進行については、会長にお願いします。</p> <p>○会長 次第に沿って議事を進めます。議題1、諸報告について事務局からお願いします。</p> | |

○図書館長

諸報告として3点報告します。

一点目は、職員採用試験について、現在、市では令和8年4月1日付採用予定の職員採用試験を行っており、若干名ではありますが、専門職として司書も採用予定となっています。

図書館としては、西東京市図書館が行っているサービスを維持していくためにも、専門職としての職員を一定割合確保することが不可欠と考えていますので、今後も専門職としての採用を続けていけるよう、庁内で調整していきたいと考えています。

二点目は、9月議会では、決算特別委員会において「西東京市子ども電子図書館」についての質問がありました。

内容としては、電子図書館サービスの効果として、電子書籍の貸出し・閲覧回数をみると、紙の資料と比較して貸出効率がよいように思われるが、どうなのか、といった内容でした。議員の方からは、依然として電子図書館について、強い関心が寄せられていることが伺えます。

三点目は、西東京市図書館を使った調べる学習コンクールについて、子ども達が持つ疑問や課題に対して、子ども達自らが図書館の資料や様々な情報を活用し調べることにより、考えを深め、判断し、表現する力を育むことを目的に、令和5年度から開催しています。

開催3年目にあたる今年度は、昨年度の応募総数373作品（小363、中10）よりは若干少ない340作品（小289、中51）となりましたが、昨年度に続いて、同程度の応募数が児童、生徒からあったことなどにより、昨年度よりも質の高い作品が多く見られました。

応募作品の中から、西東京市として優秀な作品を選び、賞を授けるとともに、財団が行う全国コンクールへ西東京市の代表として選出します。

この表彰式は、10月26日に、行う予定です。

報告は以上となります。

○会長

何か質問、意見があればお願いします。

なければ、私の方から1点、お聞きします。

先ほどの諸報告でお話があった、市議会にて電子図書館サービス関連の質問があったとのことですが、どのような質問と回答だったのでしょうか。

○図書館長

質問の詳細としては、電子図書館サービスにおける貸出、閲覧回数を見ると、タイトル数が1,554点に対して、107,082回、だいたい、1タイトル当たり年間約70回あり、電子書籍に対して、紙資料の児童書では、201,352冊、貸出回数569,064で、一冊当たり年間2.8回借りられている計算になっており、2.8回と70回を比べた時、電子書籍の方が貸出効率は良いけれども、このような差が実際にあるのか、どのような理由によるのか、という主旨の質問がありました。

回答では、前提の説明として、電子図書館サービスでは電子書籍として2つのタイプがあり、紙資料と同様に他の利用者が借りているときは借りられないタイプと

誰でも閲覧できるタイプがある旨を話しました。次に、紙資料と同様に誰かが借りていると借りられないタイプで計算すると、タイトル数1,554点の内1,068点、貸出、閲覧回数107,082回の内24,354回なので、ひとタイトル当たり年間約23回という数字になり、議員が言うとおりの紙資料の貸出回数よりも多くなっている旨を説明しました。貸出回数に差がある理由としては、元々図書館で所蔵する紙資料については、現在だけでなく、未来にわたって利用されることを想定しており、将来の利用者にも利用されることを想定して収集し、長期にわたって保存していること、紙資料においても新しく購入した資料ほど利用者に借りられる回数は多くなること、昔からある資料は借りられなくなっていくますが、過去から積み上げた資料として保存しており、図書館では貸出回数だけで資料の価値を判断しておらず、永続的に保存する価値がある資料を整理し保存する役割が図書館にはある旨を答えました。電子図書館サービスは令和5年7月から開始したこと、電子書籍自体は長期的に保存できないこともあるので、一概に貸出回数だけでは比較できない側面はあるものの、元々図書館で電子図書館サービスを導入した考え方としては、時間と場所の制約を受けない電子書籍を提供するサービスとして開始し、子どもの読書のきっかけづくりの一つとして導入している経緯もあるので、同じ土俵で比べることはできないこと、図書館としては、紙の資料も大切にしつつ、児童、生徒に電子書籍が使われるよう、どちらも充実していけるよう目指していきたい旨を答えました。

○会長

関連でもう1点質問があります。

確か電子図書館サービスは、導入時だけ図書館振興財団の助成金、また、東京都の補助金を活用されたと思いますが、東京都の方は、期間が3年間だと記憶しています。今年度が3年目ではないでしょうか。その後、来年度以降の予定等はどのように考えているのでしょうか。

○図書館長

おっしゃるとおり、令和5年度から3年間、期間限定で電子書籍の購入などの関連する費用に対して補助金をいただいています。令和7年度で終了することから、令和8年度以降の費用について、対象となる補助金など探していましたが、無いようなので、補助金に頼らず西東京市の一般財源で賄う必要があります。市の持ち出しが増えることとなります。とはいえ、補助金が無くなったから電子図書館サービスを止めるという訳にはいかないのです。紙の資料も電子書籍もどちらも大事であるということで、市の持ち出しが増えてしまいますが、現状と同じレベル感で継続できるよう予算編成に臨みたいと考えています。

○委員

一点、確認したいこととして、職員採用の件で、若干名という話がありましたが、若干名とは何人くらいの採用を予定しているのですか。

○図書館長

若干名という表現しかできないのですけれども、本当に少ない人数、1名か2名かということをして市長部局の人材採用部門から言われています。

○委員

定年退職する方がいらっしゃると思いますが。その方々と入れ替わりということでしょうか。

○図書館長

細かい話になりますが、図書館としては、退職者分の補充を要望しています。

一方で単純に退職者が出たから補充するという考え方は難しいと市長部局の人材採用部門からは言われており、一般事務職員で司書資格を持っている者であてがうという考え方もあり、司書採用の職員が退職したイコール、その人数分が司書採用にて補充される訳ではないという考えが示されています。図書館としては、現在、行っている図書館サービスを維持するためには、専門職として長く図書館に在籍し、職務内容を良くわかっている司書職員が現状の人数必要であることを市長部局の人材採用部門には伝えているところです。

○会長

他に質問、意見ありますでしょうか。

無いようなので、これで諸報告を終わります。

次に、議題2、令和6年度図書館事業評価（案）について、事務局から説明をお願いします。

○副館長

前回に引き続き、残りの5項目ということで先日、資料の方をメールで送らせていただき、本日は、その資料に対してメールで質問があった回答について説明するとともに、5項目についてお話ししたいと考えています。

本日以降の流れですが、本日の5項目について質疑応答の後、10項目について各委員が評価を付けていただき、評価内容を記したデータを会長に直接、送ってください。会長の方でまとめていただき、次回の会議の時に最終的に調整した内容を事業評価としたいと考えています。先に日程として、いつまでに会長に各委員の評価内容を送るのか協議していただきたいのですが。

○会長

次回協議会が11月14日なので、逆算すると、各委員が本日説明を受けて、評価するのが2週間程度要するとすれば11月7日となり、まとめた内容を各委員に送るのが11月12日となります。

皆さんよろしいでしょうか。（同意を確認）

11月14日、皆さんで協議し、図書館協議会としての事業評価を決定することとします。

私自身のメールアドレスは、事務局から各委員に伝えてください。

○副館長

後ほど、事務局からお伝えします。11月12日に会長から送られた内容は、事務局から各委員に送信します。

○委員

今回、初めて図書館事業評価をするのですが、評価する際のスタンスということが良くわかっていないので、説明してください。

○会長

昨年度の事業評価を参考にさせていただきながら、一項目ずつ評価する際、良い取り組みであるとか、取組内容については、もう少し工夫してほしいなどの意見を加味して、A、B、Cで評価します。

○副会長

今年度から評価基準が異なっている点として参考指標があり、その指標に対して図書館がA、B、Cで評価しています。その評価を元に各委員が評価するというのは、今回が全委員、初めてになります。図書館の評価を参考にしながら、各委員が評価した内容や意見を記すということで良いのでしょうか。

○副館長

取組内容として具体的に挙げている項目と参考指標ですが、取組内容に合致し、やり遂げている場合はAで評価して、足りなかった場合はBの評価となり、大きく足りない場合はCの評価となります。

○会長

今の説明は、参考指標として挙げている図の内、階段のパターンだと思います。

○副会長

指標が適切であるのか、という点はどのようにしたら良いのでしょうか。

○副館長

指標そのものは、元々決めてあるので、指標で評価するのは仕方がないとして、指標の設定の仕方自体に意見がある場合は、その旨を評価欄に記していただけだと思います。

今年度は、教育計画と同様に、言葉として定量評価と定性評価を用いて、参考指標の図の欄のように複雑な様式にしていますが、来年度以降は、言葉だけで表現する評価方法に教育計画もなっているので、図書館事業評価も合わせて同様の評価方法になり、お配りした様式は1年で変えることになりました。

○会長

元の評価方法に戻るといえることですか。

○副館長

いえ、指標そのものは最初に設定して、数値によるのか、スケジュール的なスパンであるのか、示しつつ、できているのかなどを評価します。

○会長

階段の図は最終的に示すのですか。

○副館長

今年度、令和6年度の評価は、お示ししたとおり残します。今年度実施している来年度時点の評価方法では、文言などで示します。

○副会長

矢印のスケジュールの図は残すのですか。

○副館長

グラフや図などで示すのではなく、言葉により説明する形になります。

○副会長

なぜでしょうか。わかりづらかったということでしょうか。

○副館長

図書館としては教育計画に合わせて変更していきます。

○会長

委員からの質問の回答に戻りますが、図書館協議会委員は、図書館の一年間の仕事を評価者として、気づいたところを指摘していただければ良いと思います。今年度初めての委員は、その点を踏まえて、全部を評価しようとしなくとも気づいた点を指摘してください。

○副館長

評価がつけやすいように指標を設定していますが、そもそも指標として設定しているものに対して、取組内容や具体的な取組といったものが、絞り込み過ぎている部分もあるので、それらも含めて指摘する点や足りない部分があれば、その旨を記してください。

○副会長

学校評価では、評価者が学校の評価内容が正しいのか、どうかを評価しますが、図書館事業評価では、図書館から示された取組内容やその評価に対して、図書館協議会委員として、感じたことや疑問を書かせていただくということでしょうか。

○副館長

そのとおりです。

○会長

今回の評価項目は10となっていますが、以前は評価項目が多かったと思います。図書館計画における全体の取組項目はいくつかありますが、最終的には5年計画なので、各年度、評価する項目数はある程度決まって、取組項目の数よりも多くは評

価対象にならないと思います。

○副館長

教育計画の5カ年で取り上げている図書館の取組は、全部で10件あり、計画期間中に一度は評価の対象とする形式となっています。図書館計画と重なる部分もあり、まとめ上げる事務作業も負担となっている面もあります。教育計画と図書館計画では評価する方々も内容も異なっていますし、教育計画の評価だけを受ければ良いということだけでなく、図書館協議会で事業評価を受ける必要があります。

○委員

図書館計画における全体の取組項目は、33項目あります。

○会長

33項目ということであれば、一年度で7項目程度になりますが、今年度は、10項目を評価しているので、若干多いくらいです。

○委員

5年間の計画なので、一項目2回の評価を受けても構わないと思います。

○副館長

基本方針が1から6まである内、基本方針6は運営管理的な要素を持つ取組となっており、他の基本方針において、各基本方針から最低でも一つの取組項目は評価を受けていただきたいと考えています。事業全体の取組項目に紐づく取組内容の数から言えば、一年度で10項目以内に絞り込めればとは思いますが、少なくしてしまうとアピール度合いが高い取組内容が目立ってしまいます。また、例えば、基本方針1にある取組項目「①幅広い分野の資料の体系的な収集」「②資料の適正な保存」でいうと、図書館の基本的な活動の部分であり、毎年度評価を受けるために、無理やりアピールするような取組を評価してもらうのは少し違うのではと感じています。基本方針1にある取組項目を事業評価の対象として毎年度挙げず、重点的に取り組んだ年度だけ対象として評価を受けるという方法も考えられます。

○委員

各基本方針に沿って施策の方向性が2つから4つまでありますが、その施策の方向性に沿った取組項目は、複数あるもの、1つのものもあり、評価対象とする際、どのように選ぶのか判断が難しいと感じました。

○副館長

各基本方針からそれぞれの施策の方向性において、複数取組項目があり、その取組項目の下に取組内容が複数ある場合は、当然、複数の取組内容を評価の対象として挙げていくこととなります。一方で各基本方針から必ず一つ対象とするのではなく、もう少し柔軟に対象を選べるようにした方が良かったのではと思っています。

○会長

今年度は、配布された資料の事業評価方法にて進めていきます。
資料2の事業評価質問回答の方を事務局から説明してください。

○副館長

質問が多かった関係上、一覧の表にした際に、どこの項目の質問なのか記載がないので、説明の中で加えながら話しします。

1つ目は、調べ学習について、資料1の1ページ目に関する質問です。
(資料2 事業評価質問回答の項目1について説明)

○会長

ありがとうございます。

資料2の事業評価質問回答ですが、各委員からの質問に対して回答していただいています。全部説明すると時間が足りないため、質問した委員が回答を見て、もう少し知りたい、聞きたいことがあるのか、確認してください。自身以外の質問については確認しなくても構いません。

○副会長

自身はかなり多く質問しているので私からお聞きします。

今説明いただいた調べ学習についてですが、聞きたかったことは、学校司書の方々が子どもたちと関わっている中、調べ学習について一人ひとりの子どもたちを一から関わり、取り組む大変さがあるので、このような質問には、このように答えた、というような図書館司書が調べる学習コンクールで成果として積みかさねた資料集的な内容を作った方が良いのでは、と考え質問に書きました。この話は、子ども読書活動推進計画の策定懇談会委員として参加されている方が強く求めていたことで、40人の子どもたちに対応するためには、成果を積み重ねた情報を共有することが大切だと仰っていました。来年度以降に図書館だけでなく教育指導課を含めて検討いただく必要があると考えて書いています。

次の「お出かけおはなし会」の箇所ですが、親子何組参加したのかと書きました。評価の仕方というよりは、わかりやすさの問題なので、そのように質問しました。また、回答の中では、0から2歳児向けは保育園で実施して、3歳児以上向けは児童館で実施していて小学生も来ると書かれていますが、放課後子ども教室については事業評価の取組内容には書かれていて、武蔵野大学の学生がボランティアとして参加しているものの、小学生向けに読み聞かせを実施するのは、図書館の中で実施するのは難しくなっているため、おはなし会ボランティアを活用してはどうでしょうかと思いました。

乳児向けについては、後ほどのマタニティブックスタートの所でも書いたのですが、質問回答の回答には絵本を介してと書いてありますが、絵本だけではなく、語りかけやわらべうたなどが繰り返される中で子どもとの信頼関係が成立し、その関係の中でこそ絵本を読んでもらうのも楽しめる。大人が子どもに本を読ませたいから読むのでは、共に本を楽しむことがむずかしくなり、結果として子どもが本をよむことにつながらない。そうならないように何らかの手立てとして、わらべうた、語りかけや手遊びも取り入れた方が良いと考えて書きました。

質問回答の6番目のYA向けのパスファインダーのところですが、各コンテンツを目立つようにしたのでアクセスしやすくなると回答がありますが、これは変更されていますか。見たところ変更されていないので、いつから変更されるのでしょうか。

○図書館長

回答に記したとおり、令和8年3月からになります。

○副会長

わかりました。

質問回答の10番目の中学生の読書フェスティバルのところですが、以前は実施されていたので再開できないのかお聞きしました。関係部署としては教育指導課だとは思いますが、ぜひ開催しましょうと声をかけることはできないのですか。

○図書館長

学校の授業計画や行事内容は、教育指導課と学校長が調整し、学習指導要領を基本にしながら最終的に学校長が決定します。その中で図書館が学校行事として加えてほしい旨を依頼することは難しいと考えています。学校の方で読書フェスティバルを学校行事として実施する計画となった際に、学校から図書館に協力依頼の流れは考えられますが、図書館から働きかけるという流れはありません。

○副会長

子ども読書活動推進計画の中で中学生の読書活動を取り上げるのですけれども、その活動として、このような取組はどうでしょうかと図書館から中学校に提案するのは可能ですか

○図書館長

過去中学校で読書活動につながる取組を実施した経緯があったとしても、現在の学校長が当時の学校長と同じように理解して協力していただけるのかは未知数だと思います。図書館が中学校に提案した際に、直ぐに実施されるという関係性は一朝一夕に作られる訳ではないので、学校行事に読書活動が取り入れられる可能性があるのかと問われて、現時点であると言える状況ではないと考えます。

○副会長

図書館として、積極的に働きかけることは難しいということ、承知しました。私からの質問に対する回答への意見は以上です。

○会長

事業評価質問回答について、他に意見などありますでしょうか。

○委員

質問回答の12番目ですが、自身で電子図書館サービスを見た時に「CATCH」本誌が入っていなかったのが質問しました。回答で「参考指標の設定から外してい

たのですが、評価をBに変更したいと考えている」との記載がある一方で回答の15番目を見ると「指標のみ評価判断となるためB評価」とあります。評価判断として矛盾していませんかとなりますが、評価指標以外の部分で懸命に取り組んでいる部分があれば、それらを加味して評価しても良いのではないのでしょうか。

次に質問回答の14番目は感想として、学校司書が市内の公立小・中学校で合わせて18名なのか、範囲を広げた人数なのか聞きましたが、アンケートに答えた人数が11名というのは、学校と図書館の関わりとしては少し寂しい結果だと感じました。

次に質問回答の15番目ですが、これも参考指標の設定の仕方について、質問のとおりに疑問に思ったので書きました。健康診査会場に来た0歳児とその保護者が後に図書館で登録した実績値を元に3%としたと思うのですが、実績として登録したのか、どうなのか、登録が増えたのかを見るのは良いのですが、3%という数字を出してしまうと一般の方々の感覚としては、少ない数値で消極的に感じられてしまうのではと思いました。指標として出すのであれば、全体に対しての割合ではなく、前年との比較割合でも構わないと思います。参考指標一つで取組を評価しますというのは、0歳児の登録者数には他律的な要素が入っていて、図書館自ら努力して達成できる要素では無い数字を参考指標としていることになってしまい、図書館職員のモチベーションが下がってしまうのではと思っています。図書館職員の方々が頑張っているレベルの指標をもう一つ設け、合わせて評価する方法を作った方が良いと思いました。

○委員

私の質問回答の11番目ですけれども、先ほどの委員との質問回答の話で、0歳児登録と絵本配布数からA評価、B評価、C評価の内、B評価として数値目標が3%となっていますが、どこから出てきた数値なのか、わかりませんでした。また、基本方針4の「(2)子どもの成長に沿った取組みを進めます」、「②小学生の読書活動の推進」にある他施設でのおはなし会の実施回数と参加人数を参考指標にしていますが、B評価に実施回数11回以下、参加人数190人以下とA評価の実施回数12回以上、参加人数191人以上との違いから評価しています。A評価とB評価の境界は何を元に決めているのか疑問に思ったので、参加指標の数字はどのようにして算出したのか、お聞きしました。回答では実績に合わせてと書いてありますが、実績をどう評価したのか、実績を達成したならば評価するのか、その辺りの基準がわかりませんでした。

図書館職員が頑張っているのであれば、前年度比で増えたならばA評価にするであるとか、下回ったならばB評価、何%か下回ったならばC評価にするなど、数値で評価する場合でも、今言ったような方法でも良いのではと考えましたが、一方で頑張っていることをもって評価するのは難しいので、数字で評価するという流れだったと記憶していますので、先ほどの話にもあった職員のモチベーションも含めて、数値と頑張りのバランスは難しいと感じて、11番目の質問を書きました。

○副館長

過去の実績というのは、今お話のあった質問回答の11番目のおはなし会の数字でいうと、前年度に実施した際に参加した人数と比較して、増えた場合はA評価と

し、同程度の場合はB評価にし、大きく下回った場合はC評価としています。記載している数値は、前年度に実施した際の回数と参加人数を基にしており、前年度と同程度の場合をC評価としています。

○委員

評価基準としては厳し過ぎると思います。

○副会長

この取組の評価自体、他施設でのおはなし会という内訳が、どこに行って何をするのか並列で扱っていて、前年度と別の場所で対象も別であるにもかかわらず、同じ土俵になってしまっています。どこをどのように力を入れて実施したのかを書いた方が評価しやすいのではないのでしょうか。昨年度より頑張った数字が増えたことで評価するのは、わかりやすいといえば、わかりやすいのですけれども、そもそも昨年度の数字を基準にして良いのか、難しいところではあります。

○委員

例えば、過去5年間の平均と比較するなどの方が良いと思います。取組自体、参加する相手があり、様々な要因で数値が変わるので、実績の数値だけで評価するのは、少し違うのではと思います。

○副会長

初めて実施する取組が多いので、余計に評価することが難しいのだろうと思います。例えば、1回のおはなし会でどのくらい子どもたちが参加する前提で実施するのか、蓋開けてみたならば参加した人数が少なかったということは絶対ある話だと思います。放課後子ども教室では、1つのイベントでも30人くらい募集すると思うので、想定していた人数よりも少なかった場合、評価を低くするという事はありますが、児童館や小さい子どもが来る施設というのは、実施してみなければ誰が来るのかわからないので、数値目標を立てにくい取組だと思います。

○委員

民間の会社に在籍して、人事や業績をどのように評価するのか、いろいろと制度を変えても難しいということがあります。今の話で言えば、2つ問題があって、1つは、業績を評価する上で、掲げた指標が適切なのか、どうかという議論はありますが、そこは別で考えていく必要があると思います。目標を立てる時点で、このような指標にしますが妥当ですか、という判断を図書館協議会で行う必要があるのだと思います。今の段階では、最終的な評価をしなければならぬので、指標の妥当性を議論するのは難しいと思います。おそらく数字の妥当性がぶれている大きな原因は、目標であるゴールを目指す時、中間指標として、ゴールに行くために、このようなことをしますという2段階に分かれると思いますが、事業評価では、最初からゴールを書いてしまっていて、何人参加したならば良いということだけを目標にしてしまっているのでは、評価が難しくなっていると思います。本来的には、このゴールを達成します、そのために何人来て、何人増えたら良いという目標を達成するために、図書館としては、宣伝を何回しますか、イベントを何回開きます

とか、中間指標を作らなければならないのですけれども、その根本的な点が明確になっていないため、評価しづらくなっていて、どのように着地すれば良いのか難しいと、皆さんの話を聞きながら、来年度以降の課題だと思いました。

図書館職員のモチベーションという観点でいうと、結果的にイベントなどに行かなかった方がいたかもしれないけれども、中間指標として、このようなことに取り組もうとして、いくつかのことは、しっかりと達成できたということであれば、図書館協議会としては、そこを評価しましょうとなると思います。逆に中間指標に対して、こういうことはできていなかったということであれば、低い評価を付けるという判断もあるとは思いますが。

KGI (Key Goal Indicator 最終目標) とKPI (Key Performance Indicators 中間目標) という概念があって、事業評価においても棲み分けして設定されていると、図書館協議会が評価する際、ゴールがわかっているならば妥当性を議論でき、ゴールを目指すKPI、中間指標である部分が、このようなことに取り組んだ方が良いのではないですか、このような部分が足りないのではないですか、という意見が言いやすくなるので、段階的な中間指標を立てた方が良いのではないのでしょうか。若干、難しいことを話していて、実際、民間の会社でも人事が大変苦労するところではあります。「言うは易く行うは難し」という部分はあると思いますが、最終目標と中間指標を切り分けるだけでも、この手の議論がしやすくなると感じました。

○会長

ありがとうございます。とても勉強になりました。

○委員

図書館や教育行政は、最終目標としてのゴールがはっきりしておらず、漠然とした形になっていて、なお且つ1つの事業でゴールがあるのではなく、もっと先に全体的なゴールがあって、KPIよりは段階は上ではあるけれども、目指すものがあり、取組を実施するところが難しいのではないのでしょうか。教育全般で言えることですが、ゴールを目指して取り組んで直ぐに結果を出すというのは難しく、教育の一端を担う図書館でも同じだと思います。

○委員

定量目標と定性目標の2段階にして、図書館協議会で全体の評価を最後にしつつ、その前の段階で、定性的にどうであったのか、定量的にどうであったのか、行動目標としては上手くできている、数字としてはこうでしたというように2つに切り分けた方が良いのかもしれませんが。

民間の会社での人事評価でも、結果としての数字、売り上げはどうであったのか、そのためにどのような行動をしましたか、というように評価が2つに切り分けられていて、管理職になると売り上げのウエイトが重くなることはありますが、行政の世界では、委員の方々の話のように、どちらかというと数字という側面だけではない、行動目標として定性的な側面に力点は置きつつ、とはいえ評価するのに数字は必要なので定量的な目標というものと両方掲げておいて、図書館協議会で両方を総合的に判断するという方法が考えられます。

○会長

図書館側が参考指標を挙げているので、今の段階では、図書館協議会としては、参考指標を加味して評価せざるを得ないと思います。参考指標について言い始めるとキリが無くなり大変になってしまうので、図書館が提示した参考指標に基づいて図書館協議会が評価することとしつつ、評価方法は、数字がどのように変化したのかという定量的な面と、図書館側の努力している定性的な面、数字では表せない面とを合わせて、図書館協議会委員として評価していくしか、現段階ではないと思います。

○委員

今回は、参考指標だけを元にして評価し、定性的な部分ということではないのですが、参考指標には入ってはいないけれども、数字的に良いところは、一切、考慮しないということですか。

○会長

事業評価で参考指標として数字が出ていた場合、その数字に対して評価しますということだけではなく、他の定量的な面、また、定性的な面で評価できる部分があれば、入れても良いと思います。

○副会長

図書館協議会委員の意見として出すということで良いと思います。

○会長

そうです。具体的に言えば、本日の資料1、令和6年度図書館事業評価（案）の3ページ目に絵本と子育て事業、ブックスタートがありますが、図書館が提示した参考指標というのは、絵本配布数分の0歳児登録者数でC評価が1%以下、B評価が3%未満、A評価が3%以上となっています。実際にどのような結果であったかという、図書館側の評価では絵本配布数1,110冊、うち図書館利用登録者数25件という数字を元にしてしています。

○副会長

3%はっていないので、それだけで評価するとB評価になります。ただ、赤ちゃんの名前で登録する人は少ないと思います。

○会長

それは、参考指標に対する意見になってしまいます。

○副会長

すみません。

次の取組項目「小学生の読書活動の推進」では、A、B、C評価には、実施回数だけではなく、参加人数を入れていて、結果としては実施回数8回、参加人数124人なのでB評価としたとわかります。

○会長

数字から図書館が評価していると、図書館協議会としては、評価を同じにせざるを得ないと思います。数字の実績からB評価と出ているところを図書館協議会がA評価、C評価を付けることをできないということです。

○委員

もし評価するならば、参考指標の実績の数字としては、例えば3%に達していないためB評価であるけれども、総合的に判断すると、この部分は評価できるのでA評価に上げるということも可能ですし、数字としてはB評価であるけれども、ある部分では全くできていない面もあるので、C評価に下げるということも図書館協議会として評価することは可能だと思います。

○委員

現実的に我々、委員は、図書館の現場を見ていない中で評価することになり、大変、難しいと思います。個人的に図書館職員の頑張りにA評価を付けたい気持ちはありますが、そのようなことはできないので、事業の目標に向かって、どのようなことをしたのか精査する、それは図書館しかわからないので、取組内容の経過がわかるように、図書館側の評価欄に書いてもらえれば、図書館協議会委員が数字を見ながら判断できます。例えば、参加するのか、参加しないのかは相手がある数字なので、おはなし会に1人しか来なかったとしても、それをもって成功したのか、しなかったと判断するのではなく、図書館の事業としては、現実的に取り組んでいく経過が大事だと思います。事務局の方で図書館職員の動きがわかるように書いていただければ、数字だけの視点ではない評価が可能になると思います。

○副会長

一点質問があるのですが、今の話にあった取組項目「小学生の読書活動の推進」に書いてある「3 学生ボランティアとの協働」の箇所で「参加人数のべ17名」とありますが、学生ボランティアの人数ということで良いですか。

○副館長

そのとおりです。

○委員

同じ箇所で意見があります。

年度当初に指標を設けて、その指標に沿って努力しながら取り組まれたということだとすれば、例えば、図書館の現場では、お出かけおはなし会は1か月に1回、年間12回程度、実施する計画で、実施回数と参加人数によるA、B、C評価を決めてから、始められたとして、年間12回できなかつた理由が分析されていて、書いてあれば、図書館協議会として、数値目標が達成できなかった時に、その理由が妥当であれば、実施回数が8回だとしても、評価する際に理由を加味できると思います。

○副会長

今の意見に追加すると、他施設でのおはなし会ということなので、児童館がメインになると思いますが、児童館から依頼がなければ行けないと思いますし、また、放課後子ども教室も同様に学校から依頼がなければ行かれないとしたならば、そもそも目標である12回実施しますというのには、可能なのかわからないと思います。回数を達成するためには、児童館や学校に事業を売り込まないといけなくなるのですが、そのようなことはできないにも関わらず、依頼により実施されることが取組結果と評価の欄には書いていません。他施設でのおはなし会ということであれば、児童館や放課後子ども教室とのやり取りがあり、来てほしい旨の依頼があり実施されると思います。お出かけおはなし会を実施しますので、来てほしい旨の依頼を待つという形ではないですね。

○副館長

一応、他施設に打診をして、了承を得られた施設に出向くという形です。児童館は、比較的連絡を取り合えるようになったので、実施できていますが、放課後子ども教室の方は、図書館側からのアプローチがあっても、今年度は、前年度よりも1校減り、5校が4校になりました。図書館側がアピールしても学校運営協議会が了承しなければ実施できないので、委員の言うとおりに、図書館側だけの努力ではコントロールできない面はあり、一方、児童館は、来てもらえるならと依頼をいただいています。

○副会長

放課後子ども教室の行事は、学校運営協議会が1年前の年度内に決めてしまうので難しいのではないのでしょうか。

○副館長

目標とは別に他施設へのアプローチはしており、話を持ち掛けた際の感触も含めて、参考指標の数字は決めています。100%図書館側でコントロールできるところではない面を参考指標の数字としているということは明らかにあります。努力した分で数字として表れない面はありますが、他施設でのおはなし会を数字で何か計るとした場合、実施した回数と参加人数以外、数字の目標にするものがないということがあります。例えば、開催した日が土砂降りで、ほとんど参加人数がいなかったとしても、参考指標は参加人数です。数字で結果を捉えた時に前年度比になり、評価するしかないと考えているところはあります。

○副会長

お話は十分、理解できますが、参考指標の表し方として、児童館のおはなし会を何回、放課後子ども教室で何回というように分けても良いと思いました。今回の参考指標は、おはなし会ということで合計した回数として12回とし、参加人数を191人としていると思いますが、質の違う取組が数として合わさって、開催に関しては努力ではどうにもならない部分を含んでしまっていると思います。

○委員

今後の参考指標の表し方として、きちっと数字で出すのではなく、何年間かの平均を出して、それに対して、A、B、C評価の段階を設定する際に、数値のプラスマイナス何%という方法にすれば、何か事情があった時に、多少増減が緩和されて捉えられる評価の仕方は考えられ、そのような方法で評価している公立図書館もあるので、その方が良いのかもしれませんが。

○会長

数字というのは、評価指標としてわかりやすいということではありますが、実際は、子どもや利用者が図書館を利用して、どれだけ心豊かになったのかは、数字では出せない部分があります。図書館の最終的な目標は、そのような心の豊かさなどを求めていくことではありますが、行政評価ではあるので割り切って評価するしかないと思います。

事業評価質問回答の方は終えて、資料1の令和6年度図書館事業評価（案）を事務局から説明をお願いします。

○副館長

（「資料1 令和6年度図書館事業評価（案）」の読み上げ、説明）

○委員

説明の途中ですみません。西東京市内の新生児は1,500人くらいなのですか。実際の数字を見て事業評価はした方が良いので。

○副館長

最大値を1,500人と捉えています。実際には、新生児の見込みとして1,400人代であり、その数字に基づいて予算を編成しています。小学生へのおすすめセレクトを1学年1,500人くらいとして事業を組み立てているので、説明の中で1,500人という数字を出しましたが、新生児は現在の社会情勢では減少してきて、1,200、1,300人くらいになるのかもしれませんが。

○委員

予算編成の都合もあり、1,500人という数字を使っているのはわかりました。将来的な新生児の人数をどのように捉えているのか知りたく、聞きました。

○図書館長

西東京市人口推移調査や統計的に推定し、おおよその人口を出しています。実際の数と推定値が何十パーセントも大きく乖離することはなく、前年度の人口動態を見て、大体の人数を算出し、予算を積算しており、事業評価の参考指標である乳幼児の人数を基礎数値として、資料には記載しています。一方で実際の数字と全く同じということではなく、指標の分母として推定値を使っているため、ある程度の誤差を含んでいるという前提で数字を捉えていただければと思います。

○委員

一つ質問として、先ほどの説明でブックスタートとして、健診会場にて配った登録用紙は色が違うので、子どもで登録した人が25件ということですが、保護者でその用紙で登録した方は、何件あったのかわかりますか。本当は、そこの数字もあった方が良いと思いました。

○副館長

保護者が色違いの登録用紙で、登録しようとした際に、マニュアル上では、本来の用紙に書き直してもらうことになっており、そのような事例もあるので、実際に用紙を持参してきた数字と登録した数字は、少し違っていています。

○委員

色違いの登録用紙で申し込んだ件数を把握できれば、効果を測れるのではないのでしょうか。

○副館長

効果があったという認識はありますが、数字としては捉えていません。

○委員

健診会場で登録用紙を渡して、登録してしまうのですか。

○副館長

現場では登録用紙を渡すだけで、後日、登録用紙を図書館に持ってきてもらい登録する流れで、保護者の登録件数を除く件数が25件となります。

○会長

続けて資料の説明をお願いします。

○副館長

(「資料1 令和6年度図書館事業評価(案)」の読み上げ、説明)

○会長

今の説明の中で聞きたいことがあればお願いします。

私の方から1つ質問です。市役所の方で何かSNSで情報発信しているのでしょうか。

○副館長

LINEで情報発信しています。

○会長

市役所で実施しているのであれば、図書館でも取り入れてみてはいかがでしょうか。

○副館長

市役所のLINEには手続きを経て、図書館も投稿するのですが、1つのお知らせ媒体のような役割になっています。双方向で受け答えしてはいないとはいえ、お知らせ媒体としては市のホームページよりは市民に届くという側面はあります。

○副会長

LINEからの通知があったとしても、図書館の情報が来たということは意識していなければ気付かないと思います。

○副館長

自分が住んでいる自治体で情報発信のアプリを登録していますが、日に何件も様々な部署から通知がきます。各部署が一生懸命に取り組まれて、重要なお知らせを発信しているとは思いますが、種々の情報に埋もれないようにするため、図書館独自で情報発信手段を設ける形の方がよいのか疑問もあります。図書館の情報発信を受け取るため登録して情報を得たいと考える方々は、発信される情報を見てくれると思いますが、情報を通知したいという動機だけでは、効果があるのか疑問に感じるところです。情報を出せば良いという話でもなく、重要なお知らせも見てほしいところですが、本来は双方向のやり取りを可能にして、これはどうなのですか、という問いくらいには答えるべきではあります。図書館という一部署で始めれば、ある程度の相手の問い合わせに対して、何日も回答しないという訳にはいかないもので、SNSの専従とまでは言いませんが、担当は必要ですし、その上で、回答する際に、所属上司の決裁を経る必要があります。やりたいことと、取らなければならない手続きとに乖離があるので、個人で発信するのとは異なり、行政として運営していくのは難しいと考えています。

○委員

副館長のおっしゃるとおり、運営上の難しさだと思います。情報発信に専門の人を配置できるのかといえば、配置できないということと、事業の性質上、管理職に確認を取らなければならず、時間を要してしまうことが障壁になっており、双方向というのは難しいのだろうと思います。

○会長

民間の事業者も同じだと思いますが。

○委員

民間でも同じではあるのですが、権限を予め情報発信部署に移してしまっ、その部署で対応することで困難な面をクリアしている民間の企業は多いと思います。行政の場合、そこまでの組織体制とするリスクを取れるのかという問題もあると思います。

○会長

やむを得ない面はあるということですね。

市役所全体からの情報発信は沢山くるとは思います、その内、図書館利用者の

方々にとっては、図書館の情報だけ欲しいという人もいないのでしょうか。

○委員

東京都のSNSでの情報発信では、上手に情報を展開していて、ジャンルを細分化して、防災、子育てというようにチャンネルを分けてアカウントを用意しています。そのようにすれば、図書館のアカウントですというチャンネルでは、図書館の情報だけを取りたい人がフォローするというのを目指せるかもしれません。

○会長

図書館の新刊案内だけでも知りたいという利用者が沢山いると思います。

○委員

LINEで西東京市スポーツセンターを友達登録していると情報が沢山くるというのがありますが、その仕組みと同じように図書館を友達登録すれば良いではないかと思いました。

○会長

議題の第2は終わりにして、議題の第3、その他として、浦安市立中央図書館の感想をお聞きして終わりたいと思います。

(各委員の感想)

(事務局の感想)

○会長

ありがとうございました。
議題の第3、その他で何かありますか。

○委員

図書館事業評価の今後のスケジュールを最初に聞いたのですが、確認させてください。

(送付する資料の、スケジュールの確認)

○会長

その他、ありますか。

では、今日の協議会を終わりにしたいと思います。次回、11月14日よろしくお願ひします。